対話：知見と進歩の基礎

「人類の安全，平和と発展のための知識の推進」

国際連合大学学長
国際連合事務次長

ハンス・ファン・ヒンケル

Hans J.A. van Ginkel

1940年インドネシア生まれ。オランダのユトレヒト大学で社会科学博士号を取得。ユトレヒト大学教授，同学長を経て，97年から現職。地理学，特に都市問題研究が専門。

私たちは大きく変化する時代に，ますます相互連結された世界で生きている。高度な通信・輸送システムの急速な発達，世界を複雑で，時として混沌とした平面的な領土や国境から，経路とそれを結ぶ接点からなる階層型システムへと変化させている。頻繁で大量のモノの交換と，ヒト，カネおよびアイデアの移動は，誰一人として切り離しては生きられない状況をつくり出している。私たちの世界は，ますますグローバル化され，知識基盤になっている。私たちの社会は，魅力的な一連の複数のアイデンティティを特徴とする個人からなり，ますます複雑で，不均質になっている。私たちはともに持続不可能な道を歩んでいる。その結果，地球の天然資源を大量に使っているため，若い世代の未来は危機に曝されている。限られた利用可能資源に対する要求が強まり，「持てる国」と「持たざる国」の間の政治的緊張がますます高まっている。

広範囲に及ぶ国際テロ，暗い経済見通しやグローバル化の結果に対する失望感の増大は，特に後発開発途上国では，ますます憂慮すべき問題になっている。テロとの戦いや，アフガニスタン，イラク，中東における戦争が重大な役割を果たし，不安感を煽っている。しかし，こうした紛争地域の外側でも，いまずぐ注意を向ける必要のある大きな問題—ごく最近ではスーダンのダルフルやソマリア—に直面している。西アフリカも，特にシエラレオネ，リベリアやコートジボワールは，戦争と暴力に苦しんでいる。まさに，持続可能な人類の発展にとって決定的に重要なのは，平和である。ここで私たちが理解する平和とは，国家間に戦争がないこと，国内に騒乱や暴力がないことをはるかに超えたものであり，寛容，相互の尊敬と，調和が広く行きわたっていることという，積極的な意味をもつものである。

私たちは新たなジレンマ，つまり生命倫理上のジレンマ，生物多様性やバイオテクノロジーの問題，エネルギー効率とセキュリティ，原子力技術の平和利用，アクセスおよび利益の分かち合い，相互に連結された世界の社会的・文化的側面等，教育と科学が多くの重要問題に関して受け持たなければならない方向に関する諸問題に直面している。まさに現在の大きな問題の

一つは、国内および国家間の文化的な多様性である。多様な、相互に緊密に連結された世界において、私たちには近くや遠くの隣人、多くの場合、非常に異なる背景をもつ隣人がいる。

他国民、他文化、他社会についての知識や情報を増やし、その質を高めることが極めて重要になってくるであろう。こうしたことを達成するには、無条件で心を真に開いて、積極的に対話する準備を整えなければならない。ディベートの場合のように、「勝とう」とするのではなく、注意深く耳を傾けることによって相手を理解しようとする事だ。対話する能力は、成熟した民主主義の前提条件なのだ。現在および将来の世代にとっての未来をより良いものにするため、私たちは、私たちの複雑な世界の特徴である、あらゆる多様性と共に生きることを学ばなければならない。様々な選択肢を政治的討議に取り入れることができるようにするための最良の方法は、社会の各構成員に発言権を与えることである。これは明らかに民主主義が意味していること、つまり、全員に発言権を与え、多様なオプションを調整する手段として妥協を促すことである。

国際関係および異文化間の関係の新たなパラダイムとして、様々な文化や国々の真の、真剣な対話を確立するという、野心的だが、必要な目標を達成するため、文化的多様性に対する肯定的な態度が社会のあらゆるレベルで育まれなければならない。例えば、エネルギーセキュリティ、バイオテクノロジーや原子力技術の進歩等、国々の中核的な関心事に直接関連する極めて重要な問題で捨てておけない場合は、なおさらそうである。こうした問題に関する対話が成功するために決定的に重要なのは、(1)他の観点を理解するための知識、(2)他の人々や見方に対する敬意、(3)自らの文化的規範および立場についての認識、(4)分け隔てるものではなく、結びつけるものを捜し求めようとする心構え、(5)包括主義を求めて努力する準備ができていることと、(6)オープンになり、また自らを変える用意があることである。

教育、特に高等教育は、受容的な態度、つまり、新たな証拠に照らして自らの意見を変える心構えを育むのに理想的な位置にある。私たちが学校や大学に行くのは、学ぶためであり、そうすることによって、自らの世界観を調整し、恐らくは変化させるためである。しかし、人々が真に情報に基づいた選択をすることができるようになるのは、大学(または学校)が既成の知識に対する学生たちの批判的な態度を許すだけにとどまらず、奨励する場合のみ可能となる。代替エネルギー源や原子力技術の平和利用に関する対話を開始する必要がある、そうした対話は、十分な理解に基づく、批判的な、オープンな精神を必要とする。そうだ、開かれた対話は、すべての正しい知見と正しい進歩の基礎なのだ。私たちの教育制度と教育機関の開放は、こうした対話を促進するために不可欠であり、こうした対話が結局は、現在および将来の世代の人々に恩恵をもたらすことになるであろう。

(2007年 2月2日 記)